「チイばあちゃん、郵便ですよ」

台所で、おやつのクッキーを焼いていると、咲（さき）の声が聞こえた。孫の咲は小学二年生。お母さんが仕事をしているので、放課後はいつも、歩いて五分のところにある、わたしの家にやってくる。

咲が手わたしてくれたのは、一枚のはがきだった。

『ししゅう展のお知らせ―わたしたちが子どもだったころ』

差し出し人は、小森俊子となっている。いったい、だれだったかしら？

はがきには、絵が印刷してあった。絵といっても、布がはってあったり、ししゅうで描いてある。

道で遊んでいる五人の女の子と、二人の男の子。女の子たちは、石けりをして、男の子たちは、ろう石かなにかで道に絵をかいている。

それを見たとたん、わたしは思わず、

「あっ」と、声をあげた。

「チイばあちゃん、どうしたの？」

「この赤いセーターの子、わたしだわ。六十年も前の」

「へえ、チイばあちゃんが子どものころ、道路で遊んでたんだ」

「そのころは、車も通らないし、道が子どもたちの遊び場だったのよ」

いつも一緒に遊んでいた、みんなの顔を思いうかべたとたん、急に気がついた。

「トン子ちゃんだ！」

しじゅう展のお知らせをくれた小森俊子さんて、トン子